

湖内でのコカナダモの分布拡大は切れ藻によって容易になされ、本調査でも、9月8日に、今夏新たに活着したと見られる草体を地点③で見出している。

コカナダモがどのように他の水草の生育を阻害しているのか、今後も観察を続ける必要がある。

参考文献

1. 浅井康宏 (1984). 日本でふえている水生植物の帰化植物. 採集と飼育 7, 291-293.
2. 生嶋 功・蒲谷 肇 (1965). 琵琶湖に野生化したコカナダモ. 植物研究雑誌 40 (2), 25-32.

3. 栗田秀男 (1984). 尾瀬沼のコカナダモ. 群馬評論 第19号, 98-100.
4. 五味礼夫 (1980). 群馬の湖沼. 上毛新聞社. 170-182.
5. 斉藤吉永 (1982). 赤城山大沼のコカナダモ. 水草研究会報 8, 5
6. 渋川女子高校生物部 (1981). 生物部々誌. Biology. S. 54-56.
7. ————— (1983). 同上 S.57-58.
8. 星 一彰 (1982). 尾瀬沼にコカナダモ侵入. 水草研究会報 7, 1

文献紹介

○Sainty & Jacobs: **Waterplants of New South Wales** (Water Resources Commission N. S. W., 21×22cm, 550頁, 1981). Aston (1973) "Aquatic Plants of Australia" の範囲の水生及び湿地生の植物の生態カラー写真集である。コケ植物1科1属、シダ植物5科6属、単子葉類23科117属(内、イネ科58属、カヤツリグサ科21属)、双子葉植物29科41属(ヤナギ属を含む)が、科ごとのアルファベチカルに配列されている。そして、属の検索表と代表種の形態的記述、自生地の状況、経済的な意義、分布(地図共)が列記されており、生態と分類の特徴を示すカラー写真が添えられている。勿論、帰化種も含まれ、どのように有害であるかが記されているのが目新しい。

巻頭に3種のKeyが与えられ利用し易くなっている。Key 1として、分類学的に科・属への検索が、Key 2には植生からの検索(例えば、高木、低木、草、葉のつき方と形状、花序など人為的な区分による)、そして、Key 3に水生から湿地生に至る生活型による区分を図示し、そこから属名が検索できるように工夫している。

Key 3の区分を紹介すると次のようである。

1. 自由に浮遊(底に着かない) サンショウモなど 8属
2. 水面浮上(浮葉) レースソウなど11属
3. 浮上乃至抽出 ミズキンバイ、オモダカなど3グループ19属
4. 沈水で羽状分裂葉(時に抽出) フサモ、タヌキモなど3グループ9属
5. 沈水(葉はほぼ全縁) セキシウモ、ヒルムシ

ロなど4グループ29属

6. 抽水 スゲ、タデなど2グループ45属
 7. 低小草で沈水または泥生 ヌマハコベ、シャジクモなど9属
 8. 高木、低木 ヤナギ、マングローブなど7属
- そして、本文となり各種ごとの解説が続き、その後で付録として、稲田に侵入する水草類、水草の種子の写真、淡水藻類と水の汚濁との関連、水草を食害する魚類・ザリガニ・ネズミ・貝類・バクテリア類にまで及ぶ広範な解説が加えられている。更に、生物学的コントロールの項を設けてホテイアオイやalligatorweed、サンショウモなどの猛烈な繁殖ぶりや天敵(昆虫)による駆除効果などかなり具体的に記述している。

最後に、富栄養化の問題と水質管理の現状を水生植物の処理方法(除草剤も含めて)の実際等で簡潔にまとめているのが特徴的である。(小宮 定志)

○「宍道湖の自然」(山陰中央新報社、1985年5月、179頁、2800円)

淡水化の是非をめぐって議論のまきおこっている宍道湖の自然を紹介した好著である。「宍道湖のおいたち」、「宍道湖の魚たち」、「湖底の生きものたち」、「宍道湖の鳥たち」、「宍道湖の水生植物」が、283枚のカラー写真で紹介され、後半に詳しい解説が付されている。水生植物は湖に流入する河川・水路も含め27種あげられている。本格的な調査は今後の課題であるという。(角野康郎)